

四カ月、静養に努めて元気になった。その後も再三発熱した。療養中に妻が銃後の護りだと、私の出征中のことをポツポツと話した。「無事に帰って来たから全部帳消しです」といいながらも、恨み辛みを。

出征の翌日には町会長さんが表札と並べて出征兵士の家と書いた板を貼りつけて「これからは何でも言つて下さい」と言葉を残して帰られた。それでも町内の仕事は男のいる家も出征兵士の家も均等割でした。なんでも配給生活ですが男不在の家には残り物を少し分けて呉れる程度で、役員の中にはお情で面倒を見てるというようでした。子供も両親のいないで遊んでいてもすぐ解る位で、可哀想な事が多かった。毎晩子供に添い寝しながら「今頃何所でどうしているか」と思いながらウトウトすると鶏の声で眼を醒まし朝になる。毎晩が睡眠不足でした。

お金は有りましたが、金で物が買えない時です。親からの仕送り（食物）と子供を連れて農家の手伝いに行き、米やいも等を貰ってどうにか生活していた……とか。戦場では私が生命がけだった。家では妻子が生き

て行くため筆舌に尽くせぬ思いをした。今子供等にそうした悲惨なことや苦勞のことを話しても「あ、そう」というだけだ。

私達夫婦にとりましては、長い人生の中で、一番恐ろしい悪夢の空間でした。二度と戦争のない平和を祈ります。このような話し相手の妻も、先年帰らぬ人となりました。私の後から行ってほしかつたのにな……。「話の途中にも、終わってからも彼の目に光るものを二、三度見た。」

## 回 想

福島県 伊藤 司

### 一 輸送船乾瑞丸轟沈記

昭和十九年十二月二十三日の朝、台湾の高雄港を出航して六日目、わが乗船の老朽輸送船「乾瑞丸」は、途中、機関に故障を起こしたために、船団主力から取り残されて、ただ一隻、上陸地点のリンガエン湾北サ

ンフェルナンド港を目指して南下中であつた。

私は、船橋の前方で、左舷近くの上甲板に立つて、進路の左方に見える緑の島、ルソン島が、遠からずわれわれの戦場となることを考えて、胸の高鳴りを覚え

た。

突如、九時二十分ごろであつたらうか。船に耳をつんざくような三発の爆発音が連続して起こつた。最初の二発は、船橋の直下であり、最後の一発は船首の近くであつた。足元を揺るがす強力な振動と、体を叩きつけるような黄土色の爆風で体は宙に飛んだ。敵潜水艦の魚雷攻撃というのが直感であつた。反射的に、一船が沈む、直ちに船から退避しなければ、という思いが頭に閃いた。見る間に、船は大きく右に傾いて、左の船腹が大きく露呈した。私は舷側を力一杯蹴つて海中に飛び込んだ。海面に浮かび上がった瞬間、何故か、助かつたと思つた。振り返つて見ると、「乾瑞丸」は船首を高くし、船体の大半は海中に没していた。

珊瑚礁の海岸には、住民の人影は全くなかつた。太陽だけがキラキラと輝いていて、やけに暑かつた。岸

に無事に泳ぎついた者は、ほとんどが着のみ着のまま

で、全くの丸腰であつた。われわれは、傷ついた仲間を、誰彼の区別なく、救いあげ、また漂着した夥しい数の遺体を海から引きあげて、所属隊ごとに分別することにした。すべての者が、とうに、時間の観念を失つていた。

太陽が沈むと、気温は急激に下がつた。海水に浸かつた衣服は、昼間は乾いていたが、夜に入るとベトベトしてきて気持ちが悪かつた。暗闇の海岸のあちこちで、九死に一生を得た者達が集まって焚火をしていた。火だけが赤く見えた。突然、暗闇の海上で灯が点滅した。明らかに信号であつた。それに呼応するかのよう

に、海岸線の黒い山裾から照明弾がヒュルヒュルと上がった。かくして、われわれは、ルソン島上陸第一日目の夜を、不気味な中で、食う物も無く、眠ることもできずに過ごすことになつた。

翌二十四日、昼少し前、第二大隊長（輜重兵十連隊、米倉大尉）が部下とともにトラックで救援に来てくれた。わが隊は、連隊長（鍋島大佐）を含む多くの戦友

と、軍馬、武器、弾薬、糧秣、医薬品等の一切をこの海没で失った。近くの椰子木立の中で、遺体を茶毘に付して、亡き戦友の御霊の平安を祈るとともに、仇敵への報復を堅く心に誓った。

## 二 連絡係將校余話

「師団主力は、カラバリヨ山系のバレテ峠東西の線に陣地を占領し、敵の攻撃を破壊する。」

これが、わが師団（第十師団）の任務であった。山は峻峻、密林に覆われて昼なお薄暗い地帯であった。師団司令部は、バレテ峠東側の天王山の山頂近くにあった。わが部隊（輜重兵第十連隊、連隊長相沢少佐）の主力は、バレテ峠の東北、約四キロの深い谷地、大和谷に布陣していた。私は連隊本部付きの連絡係將校として、毎日、師団司令部へ命令受領に行くのが主な任務であった。司令部では、參謀長（土屋少將）や各參謀から、各隊の戦闘状況や戦況の変化に対処する方途が説明され、陸士を卒業して、日なお浅い私は、それらを聞いて大いに興奮したものであった。

ときには、師団長（岡本中將）にも間近かでお会い

することができた。後方主任參謀は平林少佐で、私が陸士在校時代の戦術教官であったが、直接の御指導は受けていなかった。

昭和二十年一月十五日、独立歩兵第十一連隊（連隊長津田大佐）を基幹とする津田支隊は、わが師団に配属となり、防衛陣地の左翼を守備するために、スペイン旧道鈴鹿峠付近に陣地占領を着手した。

平林參謀は、津田支隊の布陣の状況を視察することになり、私は選ばれて随行した。鈴鹿峠一帯は、バレテ峠と同様に、峻峻、密林の地帯であった。支隊本部で連隊旗手の深山少尉に会った。彼とは、陸士校の同期、同中隊、同区隊、同寝室で、それこそ、寝食をともにしてきた仲間であった。また、同期の藤崎少尉もおるとのことであった。その奇遇に驚き、喜ぶとともに、彼は「俺は真剣に考えた。自信はある。」という支隊の陣地構築を、早速、私に見てくれと急ぎ立ててきた。われわれ二人は山の中を一緒に歩き回りながら、「重機の位置はここ、速射砲陣地はあそこ」と陸士校時代の「野外戦術」の演習に戻ったかのように論じ合

った。

この陣地は、三月十日、砲爆撃と戦車支援の下に進攻してきた敵の攻撃によく堪えて、密林内からの反撃とスペイン旧道東方に配備した砲、迫の有効な射撃によって、敵に甚大な損害を与えてこれを撃退したことは、いまなお戦史に明らかなどころである。

この深山少尉は、昭和二十年六月二日、バレテ峠北方の竜山で戦死し、また、藤崎少尉も、その前日の六月一日にバレテ峠で戦死している。